杢目金（もくめがね）

１　種　　別　　無形文化財
２　名　　称　　杢目金
３　保持者の氏名、　　林（はやし）　美光（びこう）（昭和12年９月19日生）　秋田市
　　生年月日及び住所　　千貝（ちがい）　弘（ひろし）（昭和19年２月１日生）　秋田市
４　説　　明

杢目金は、色味の異なる金属を重ねて融着し、表面を削ることで現れる杢目の模様を活かした金工技法である。

制作は、はじめに銅や赤銅、銀、金などの金属板を同じ大きさに整えてから研磨し、交互に重ねて加熱し融着させる。冷却後、模様を出すための削り取り、ハンマーによる鍛圧、熱を加えて金属の柔軟性や弾力性を回復させる焼鈍（やきなまし）を繰り返して板状に打ち延ばし、色味の重なりを活かした地金となる。こうして得られた地金を様々な技法を用いて必要な形に加工していくが、極限まで鍛圧した地金は剥離することもあり、より慎重な作業が求められる。最後に十分に研磨した後、薬液の中で煮込む煮色仕上げによって独特な発色の表面に仕上げる。また、作品によっては成形してから表面を削って模様を表出させる場合もある。杢目金の制作工程では融着がもっとも難しいといわれる。これは金属によって融点が異なるためで、経験に裏打ちされた高度な技術が必要とされる。杢目金が持つ模様や深い色彩は、効果的に使用することで他では得られない独自の魅力を生み出すことができる。このため、現在多くの分野で注目されている。

杢目金は、３代秋田藩主佐竹義処（さたけよしずみ）に仕えた正阿弥伝兵衛（しょうあみでんべえ）（鈴木重吉、1651～1727）が考案したとされ、江戸時代には刀装具の制作に用いられた。その後は途絶えていたとされるが、後に秋田の進藤鐵治（しんどうてつじ）（1894～1983）により復元され、秋田ゆかりの技術として継承されている。現在は林美光氏、千貝弘氏らが長年の研究と研鑽によって技術を修得し、花器や茶道具、飾り箱などの作品を制作している。林氏は伝統工芸日本金工展において受賞を重ねた他、三井ゴールデン匠賞で審査員特別賞を受賞するなどその技量は高く評価されている。同じく千貝氏も伝統工芸日本金工展で受賞、技術を公開して後進の指導にも尽力している。

深みのある色彩を複雑に組み合わせる杢目金は、芸術的にも価値のある高度な工芸技術として貴重である。

参考文献

秋田県教育委員会　秋田県文化財調査報告書第105集　『秋田の工芸技術』　昭和58年(1983)３月31日
秋田市立赤れんが郷土館　平成十年度学習講座集録『秋田の金属工芸』　平成11年(1999)３月
秋田県教育委員会　『お宝発見ハンドブック～工芸技術編～あきたの工芸』　平成19年(2007)３月
公益社団法人日本工芸会金工部会　『金属工芸　伝統工芸作家の仕事』　里文出版　令和４年(2022)４月27日